

もくじ 文化フライの思い出 … P1 足立民具図典② 田植え綱 … P2
はい、文化財係です②③ 舎人氷川神社本殿 … P4

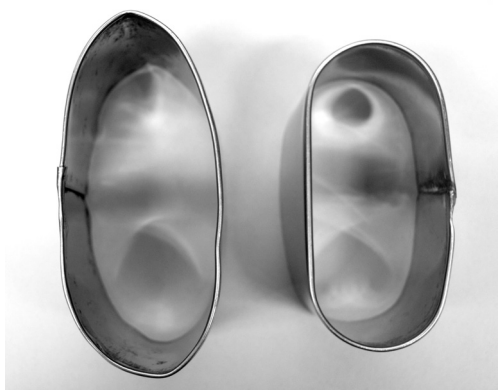
足立史談

第 634 号

2020 年 12 月 15 日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田 5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562



(上) 屋台にかけていたノレン
37cm × 173.5cm
木綿の茶色い布に、丁寧にミシンで縫い付けられている白い布の文字。



- 製造道具
- ボール 内径 27cm
 - のし棒 26cm・29cm
 - 小判型 13cm × 6cm × 9.2cm
11.5cm × 5.7cm × 7.5cm
 - のし台 39cm × 46.55cm × 3cm

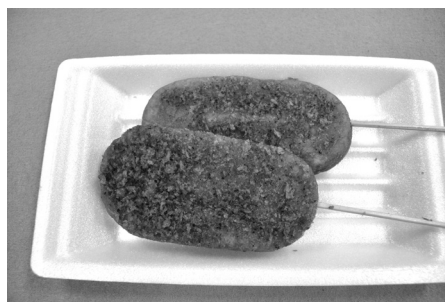
新しい方は、清治さんが最後（2005年）まで使用されていた。

今年（令和二年）の二月、清治さんが亡くなられた、大切にされていた文化フライの製造道具を御家族から当館に御寄贈いただきました。

郷土博物館では二〇〇九年、リニューアルした常設展示、「東郊の食」のなかで、郷土の食べ物として文化フライを紹介し、翌年の特別展示のイベントで、文化フライ紹介のホームページを開設している、はすぴーさんの講演会と、試食会を開催しました。その際には、清治さんにご協力をいただきました。

文化フライの思い出

郷土博物館



川商店・長谷川政子さん（昭和九年生）が考

文化フライは、小麦を練って小判型に型をとったものに、細かなパン粉をつけて油で揚げ、特製のソースをかけた食べ物で、縁日の屋台で販売されていました。実は肉や野菜は入らず小麦粉だけの揚げ物です。文化フライは、足立区梅田の長谷川商店・長谷川政子さんが考

案した食べ物で、一九九九年の十一月までは、もう一軒の別の方の店があり、二軒だけで売られているものでした。政子さんは、昭和三〇年ころから西新井大師の縁日、千住の勝専寺の縁日など区内をはじめ、台東区鳥越神社の祭礼、草加市谷塚の浅間神社祭礼、地元、梅田五丁目の盆踊りなど周辺の社寺の縁日やお祭りに屋台を出していました。

政子さんは二〇〇一年の春に引退されたため、屋台での販売がなくなり、区内の飲食店への卸し売りと、注文販売を受けていました。二〇〇六年に政子さんが亡くなられたのち、その製造販売は、夫の清治（きよよし）さん（昭和三年生）が続けられました。

ました。

その道具はシンプルなもので、材料である小麦粉を練るボールとそれを伸すのし台、小判型に抜く型です。

のし台は、屋台で使うのに便利な大きさで、ステンレスを巻いた手製のものです。動かないようにシリコン製の滑り止めが裏面に四か所貼られています。のし台を左手に、鍋を右手に置いて、形を抜いたらすぐに揚げられるようにしていたそうです。

文化フライの生地作り方は「企業秘密」とされており、長谷川さん亡きあと長谷川商店のレシピは不明のままです。清治さんが作っていたものも、政子さんとは少し違うとのこと、清治さんの工夫・改良が入っていました。清治さんと親しくしていた千住の飲食店・宏月（こうげつ）が復元していますが、小麦粉にはガムシロップでほんのりと甘みがついており、また、特製ソースは、通常のソースに出汁の風味が入ったさりとしたものです。これをたっぷりつけて食べます。

御家族によると、元々は、お客様が来ると、のして、型を抜いた作りたてを揚げて提供されていました。型を抜いたものを現場に持って行ったのは、お正月等のかきいれどきだそうです。とくに作りたてのものは、やわらかく、油が跳ねないよう優しい手つきで鍋に入れ、入れるときに

はフライがしなったそうです。

当日の朝（型を抜く前の状態で）作って、すぐ現場へ。買う側は、実演が見られて、口上が聞けて、クジ（政子さんは、「ぶんまわし」とよんでいました）もできて、出来立てを食べることができました。

型抜き済みのものを現場に持って行くようになったのは、恐らく、作り手が高齢化して、昔のように最初から作るのが厳しくなったからではないかと推測します。

「ぶんまわし」とは四角い板の中央に、釘で取り付けた幅の短い木の板が回る手作りのルーレット式のクジで、文化フライを買う人はこれを回すことができます。ハズレは、一本（つまり通常の値段）ですが、当たると、二本、三本とその本数がもらえます。三本はめつたにできることがありますが、文化フライの販売は皿をつけずに手持ちで渡されるため、当たると持ちづらく、子どもには、うれしくもちよつと困ることもありました。

お祭り、縁日の楽しい記憶とともに、長谷川さんの文化フライの屋台と味は、足立の愛されフードとして伝えられていくでしょう。

はすぴー倶楽部
<https://www.hasupy.com/>
 宏月
 足立区千住三二六八

あだち民具図典②
田植え綱

足立の歴史文化を知る手立てとなる郷土博物館の収蔵する生活資料の紹介を行います。

■田植えの歴史 一列に揃った稲がそよぐ青々とした田んぼは美しく、日本の原風景などといわれることもよくあります。ところが、稲が列を揃えて植ええられるようになったのは、それほど昔のことではありません。

縄文時代、稲作が行われ始めたころは、水田に籾を直接蒔いてそのまま育てることが一般的で、苗を育てて、本田に植え替えを行う、いわゆる田植えを行うことはあまりなかったと考えられています。

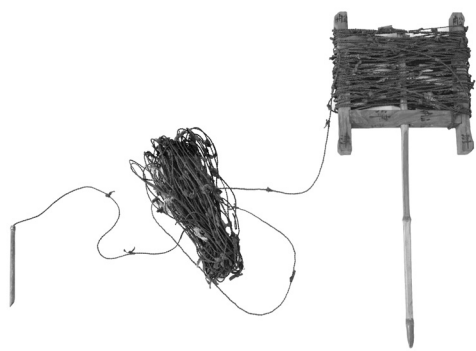
田植えは、ある程度成長した苗を取って植えることで、すべての稲の成長を揃えること、雑草に負けずに生育すること、などのメリットがあり直播より収穫量を上げることができます。田植えは、奈良時代には広まっていたと言われています。

しかし、現在のように列をきちんと揃えて植えたのではなく、必要な間隔をあげながらも、適当に空いたところに植える方法がとられていました。正条植え（せいじょううえ）とよばれる列を揃えて植えるように

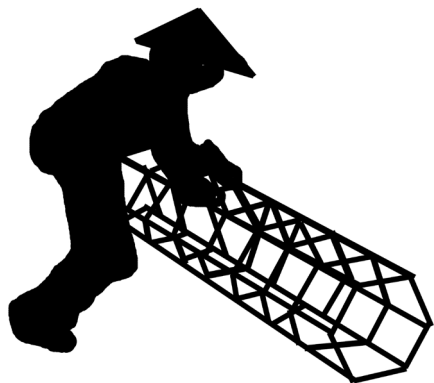
なったのは、明治時代のなかごろからで、その普及には、県や郡の農会などが積極的に関わっていました。

列を揃え、等間隔で植えることによって、稲株の日当たりや風通しがよくなり、病虫害を予防し生育を促すこと、また、株の間に除草機を使用することができるようになり、農作業の効率化にもつながりました。同時に改良された苗代（なわしろ）の作り方と合わせ、正条植えによって収穫量があがり、必要な種籾や苗の量も計算できるようになりました。米の収穫量を増やすために、正条植えは奨励され、全国的に、一斉に田植えの方法が変わることになりました。

■植え綱 正条植えは、縦・横ともに等間隔で植えることが理想で、正しく稲を植える場所の目安が必要です。そのために使用されたのが田植



(写真1)
 足立区江北で使用されていた植え綱



(写真 2・3)
田植え枠 (新潟県南塩沢市) とその使用方法。
使わないときは、葺の脇などにつるして保存さ
れていた。

え綱・植え綱とよばれる道具です。
(写真 1) の植え綱は、足立区江北
のもので、等間隔に赤い小さな布が
結んである細い棕櫚縄のような固い
紐です。糸巻きに巻かれていて、必
要な長さが繰り出せ、水田の端に差
して使うことができるようになって
います。水田に張られた紐について
いる赤い布を目安に、人は一列に並
んで自分の手の届く範囲の稲を植え
ます。その列が植え終わると、植え
綱を動かし、次の列を植えます。人
は後ろに下がりながら植えること
になります。

の水田に転がし、土に跡をつけるもの
です。田植え枠をこころがした跡には、
マス目ができます。線の交わったこ
ろに稲を植えるので、確実に等間隔に
植えることができます。マス目の間隔
も計算されており、当時稲の生育に最
適とされる寸法になっています。交差
地点を踏まないように、前に転がし、
水田の大きさに応じて、何回か往復し
ます。まっすぐ転がすのはなかなか難
しく労力を使う作業です。

田植え枠には、八角形のもの、三角
形のもの、また、ほぼ円筒形に見える
ものなどさまざまな形と長さがあり
ます。名称も、転がし、田植え定規な
ど地方によって違いがありますが、土
に線をつけるという点では同じ働き
をするものです。

■正条植えの道具と地域差 正条植

えを簡単にするために工夫された道
具は、その地方で発案されたり、あ
るいは先進地域のもを真似したり
改良したりということも普及しまし
た。足立区周辺地域、関東平野は大
稲作地帯ですが、田植え枠の使用例
はありません。逆に、友好都市であ
る新潟県魚沼市周辺では、植え綱は
使われず、田植え枠が一般的です。
実用の道具は、その土地の風土や
作業条件に適したものが発展しま
す。その違いには、理由があると考えら
れます。

現在の水田は、棚田などを除いて
耕地整理が行われ、一反以上の長方
形の大きさに整えられた姿です。明
治三二(一八九九)年に施行された「耕
地整理法」以前は、小さく不定形な
水田がいくつもあるのが普通でした。

とはいえ、関東平野と山がちな魚
沼地方では、基本的な水田の大きさ
が異なっていると想像されます。田
植え枠は、二人で転がすような大き
いものもありますが、大きめな水田
で使用するには、結構厳しい道具とい
えましょう。

また、水田の大きさと関係する点
でもありますが、一枚の水田の田植
えと一緒に取り掛かる人数にも違い
があるのではと思われれます。足立区
では田植えを互いに手伝いあうユイ
といわれる相互扶助のほか、二合半

領(吉川・三郷)の人たちを田植え人
足として複数人雇うことが発達して
いました。植え綱の場合、植えるに従っ
て綱を移動させる必要もあり、二、三
人では非常に効率が悪いでしょう。そ
れなりの人数が一枚の田植えに取り
組んだことがうかがえる道具です。

一方、田植え枠は、一人が先に転が
しておけば、苗の補給をする人は必要
ですが、枠の跡に従って一人でも植え
ることが可能です。

また、関東平野、埼玉県群馬県では、
水田の裏作に麦を作ることが多く、麦
の収穫は六月なのでそれに合わせて
田植え時期も遅くなります。麦を収穫
してから急いで水田の準備をするこ
とになります。耕耘してからまだ耕土
が鎮まらないドロドロしたうちに田植
えをすることになるので、田植え枠で
は跡がつけられないともいいます。新
潟県は豪雪のため、裏作で水田を使う
ことがなく、耕土が落ちついており、
よく跡がつくということです。

そのほか、水田の水のかけひきが容
易であること、乾田か湿田か、など
によっても、影響があるかと考えられま
す。

田植えという日本中どこでも行っ
ている農作業も、そのやり方や道具は
その土地の自然環境、作業工程など
によって異なり、地域の特徴を知るひ
つとなるのです。

はい、文化財係です⑳
舎人氷川神社本殿

—身近にある彫刻美—



師走を迎えて半月が過ぎ、新年もすぐそこまでやってきました。新年といえばつきものなのは初詣ですが、今年は新型コロナウイルスの感染拡大防止のために、いつもと違う初詣となりそうです。

さて、今回ご紹介するのは、例年初詣の人々が訪れる舎人氷川神社（舎人五―二二）にある足立区登録有形文化財「舎人氷川神社本殿」です（以下、

「本殿」と省略）。この本殿には、区内有数の彫刻が施されており、観る者の目を引き付けます。

■舎人氷川神社 舎人氷川神社の創建は古く、鎌倉時代初期の正治二年（二二〇〇）に、大宮（埼玉県さいたま市）の氷川神社を勧請（分霊を招くこと）したものと伝えられています。御神体と伝わる懸仏と江戸時代に舎人氷川神社が神階を授与された際の際の古文書がそれぞれ足立区登録有形文化財となっています。

現在、拜殿や本殿は、基壇の上に建っています。この基壇は、明治二年（一八六九）九月に舎人町・入谷村・遊馬村（埼玉県草加市）の氏子中が

造立したものです。近代的な行政区画で

ある東京都と埼玉県が明治四年に成立し、舎人と遊馬は埼玉県に、入谷は東京府に編入され、三地域は分離してしまいました（後に舎人が東京府に編入されます）。明治四年以前は舎人領とよばれる一つの地域としてまとまっていた。そのため舎人氷川神社は遊馬村の人々にも信仰されていたのです。

ちなみに基壇が建てられた前年の明治元年九月十六日に、この地域を洪水が襲い、大きな被害をもたらしました。それからちょうど一年後に基壇が造立されているので、水害から本殿を守ろうという人々の意図が読み取れます。

■本殿の彫刻 本殿は総檜づくりで、江戸末期から明治初期の建築ですが、はっきりしたことはわかっていません。

て高く評価されています（写真下）。

本殿正面の扉には牡丹や唐獅子などが彫られ、本殿左右と後ろの壁には八岐大蛇（やまたのおろち）退治や天の岩戸開き・天孫降臨といった日本古来の神話が彫られています。他にも、千尋の谷に我が子を突き落とす獅子の図などもあります。いずれの彫刻も一つ一つが丁寧な彫られており、かなりの力量を持った作者が彫ったということがわかります。

これだけ見事な彫刻を持つ本殿を造立するには、多額の費用と時間がかかったはず。舎人は江戸時代から宿場として栄えていたので、本殿を造立する上で、中心的役割を果たしたと推測されます。

■本殿を守るフェンス 現在、本殿は格子状のフェンスで厳重に保護されています。そのため彫刻を見るには、どうしてもフェンス越しとどうしても見えます（フェンス越しでも十分に彫刻を見ることが出来ます）。フェンスの設置はすでに戦前には行われていたといい、本殿を大切に守つていこうとした当時の人々の気持ちが伝わってきます。

荘厳な彫刻が施された舎人氷川神社本殿は、同社に対する人々の篤い崇敬と、舎人地域の繁栄ぶりを伝える貴重な文化財です。

（文化財係学芸員 佐藤貴浩）



上：舎人氷川神社本殿 下：左柱上部の龍

本殿のいたるところに施された彫刻の題材は多岐にわたります。正面左右の柱となげし状の横木には龍が全部で九体彫られています。特に左柱上部の迫力ある龍の相模は、その技法が極め